

けいせいあわ なると

## 傾城阿波の鳴門

〔解説〕明和五年（一七六八）六月、竹本座初演。近松半二、竹本三郎兵衛、八民平七らの合作。夕霧伊佐衛門を題材にした近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」をもとに、阿波徳島、玉木家のお家騒動を絡ませたものです。当時、阿波の浪人が、大坂玉造に仮住まいをして、詐欺・ゆすり・追いはぎなどを働いていた。ある日、順礼の子が、金を持っていくのを知り、だまして家に連れ帰り、深夜しめ殺して、死体を畑へ埋めた。しかしこれが露見したため、召し捕られ、重罪に処せられた、という実説を取り入れています。

〔あらすじ〕阿波徳島玉木家の若殿が遊女におぼれているのに乗じて、悪家老の一味はお家横領を企てていました。同じく家老の桜井主膳はこの状態を憂えていたのですが、預かっていたお家の重宝「国次（くにつぐ）」の刀を盗まれてしまいます。この刀の探索の為、家臣十郎兵衛は、銀十郎と名を変えて、妻お弓とともに盗賊の仲間に入ります。〔順礼歌の段〕ある日、十郎兵衛の留守に、順礼の子が門口にやってきました。お弓は、話を聞くうちに、国元に残してきた娘のおつるとわかりますが、親子と名乗ると盗賊の罪が娘にかかることを恐れ、一旦は追い返します。しかし、今、別れてはもう二度と会うことが出来ないといい直し、おつるの跡を追います。

# 順礼歌の段

道へ立帰る

あと打眺め女房が、心がかりと封押切り、読む度毎に驚く胸

「ヤア、こりやこれ、夫を始め仲間の衆へも吟味がかゝり、詮議厳しくなつたる故、とらへられし者もあり。最早遁れず立退けとの知らせの状、スリヤ夫の身の上も、今日一日にせまつた難儀、昨日長町裏で危い所を漸々遁れ、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、今又この状の文体では、中々こうしてゐられぬところ。我とても女房の身、殊に騙りの同類なれば、罪科遁れぬ夫婦が命、今更驚く気はなけれど、一合取つても侍の、家に生まれた十郎兵衛殿、盗賊騙りと成り果てしも、国次の刀詮議の為、重い忠義に軽い命、捨つるは覚悟といひながら、肝心のその刀、在所も知れぬその内に、もしこの事が顕れては、これ迄

尽くせし夫の忠義、皆むだ事となるのみか、死んだ後迄盗賊に、名を穢すのが口惜しい。盗み騙りも身欲にせぬ、女夫が誠を天道も、隣れみあつて国次の刀の詮議済む迄の夫の命助けてたべ」

と心の内に神仏、誓ひは重き観世音。

へふるさとをはるばる、遙々こゝに紀三井寺

「順礼に御報謝」

と、いふも優しき国訛

「デモしほらしい順礼衆、ドレ／＼報謝進ぜう」

と、盆に白米の志

「アイ／＼、有がたうござります」

と、いふ物腰から棲はづれ

「可愛らしい娘の子、定めて連衆は親御達、国はいづく」

と尋ねられ

「アイ、国は阿波の徳島でござります」

「ム、何ぢや徳島、さつてもそれはマアなつかしい、わしが生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に順礼さんすのか」

「イエ、その父様や母様に逢ひたさ故、それでわし一人西国するのでござります」

と、聞いてどうやら気にかゝる、お弓は猶も傍に寄り

「ム、父様や母様に逢ひたさに西国するとはどうした訳ぢや、サそれが聞きたい、言ふて聞かしや」

「アイ、どうした訳ぢや知らぬが、三つの年に父様や母様も、わしを祖母様に預けて、どこへやらいかしやんしたげな。それでわたしは祖母様の世話になつていたけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見たい、それの方々と、尋ねて歩くのでござります」

「ム、シテその親達の名は何と言ふぞいの」

「アイ、父様の名は十郎兵衛、母様はお弓と申します」

と、聞いてびっくり

「コレ、アノ父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、祖母様に育てられていたとは、疑ひもない我が娘」

と、見れば見る程稚顔、見覚えのある額の黒子

「ヤレ我子かなつかしや」

と、いはんとせしが

『待て暫し、夫婦は今もとらるゝ命、元より覚悟の身なれども、親子といはゞこの子にまで、どんな憂目がかかるやら、それを思へばなま中に、名乗り立てして憂目を見んより、名のらでこのまゝ帰すのが却つてこの子が為ならん』

と、心をしづめよそ／＼しく

「オ、それはまあ、年はも行かぬにはるばるの所を、よう尋ねに出さつしやつたなう、その親達が聞いたなら、

さぞ嬉しうて／＼飛立つサア、飛立つ様にあらうが、まゝならぬが世の憂ふし、身にも命にもかへて、可愛子をふり捨て、国を立退く親御の心、よく／＼の事であらう程に、むごい親と必ず／＼恨みぬがよいぞや」

「イエ／＼勿体ない、何の恨みませう、恨みる事はないけれど、ちいさい時別れたれば、父様や母様の顔も覚え、余所の子供衆が、母様に髪結ふて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母様があるならあのやうに髪結ふて貰はう物と羨やましようござんす、どうぞ早う尋ねて逢ひたい、ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす」

と、泣いちや／＼くりするいちらしさ、母は心も消え入る思ひ

「扱も／＼世の中に、親となり子と生るゝ程ふかい縁はなけれどもナア、親が死んだり子が先立つたり、思ふ様

にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ねても、顔も所も知らぬ親達、逢はれぬ時は詮ない事、もう尋ねずと国へ往んだがよいわいの」

「イエ／＼、恋しい父様や母様、譬へいつ迄かゝつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやて、何処の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては、た、た、たゝかれたり。怖い事や悲しい事も、父様や母様と一所にいたりや、こんな目には逢ふまい物を、何処にどうしていやしやんすぞ、逢ひたい事ちや／＼、逢ひたい」

と、わつと泣き出す娘より

見る母親はたまり兼ね

「オ、道理ぢや。可愛やいちらしや」

と、我を忘れて抱付き、前後正体嘆きしが

『これ程親をしたふ子を、何とこのまゝ往なされう、い

つそ打明け名乗らうか、イヤ／＼それではこの子も同じ罪、その時の悲しさを思ひ廻せば去なすが為』と

「オ、段々の様子を聞き、我身の様に思はれて、悲しいとも情ないとも、いふにいはれぬことながら、とかく命が物種、まめでさへいりや、又逢はれまい物でもない、コレ、仕付けぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い、何処をしやうどに尋ねうより、その祖母様の方へ往んでいると、追付け父様や母様が逢ひに行てぢや程に、悪いことは言はぬ／＼、何のまたこの小母が、わが身のためにならぬ事を言ふてよいものか／＼いの。思ひ直して、これから直ぐに国へ往んで、随分まめで親達のたずねて行かしやるを待つているのがよいぞや」

と、言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板のまめなを喜ぶ餞別と紙に包んで持つて出で

「コレ、何ぼ一人旅でも、たとと銭さへやりや泊める、

わづかなれども志し、この銀を路銀にして、早う国へ去にやや、必ず／＼煩ふてばしたもんな」

と、銀を渡せば

押し戻し

「嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を、たとと持つております。そんなりやまうさんじます、忝うござります」

と、泣く／＼立つを

引とぢめ、無理に持たして塵打払ひ

「コレもう去にやるか、名残が惜しい別れとむない、コレま一度顔を」

と、引寄せて、見れば見る程胸せまり、離れがたなき憂

思ひ

それと知らねど誠の血筋、名残り惜しげに振り返り

「どこをどうして尋ねたら、父様や母様に逢はれること

ぞ、逢はしてたべ南無大悲の観音様」

へ父母の、恵みも深き粉川寺

泣くく別れ行く後を、見送りく延び上り

「コレ娘、ま一度こちら向いたもくのナウ、せつかく長の海山越え、艱難してあこがれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひはあひながら、名乗らで退なす母が気は、どの様にあらうと思ふ、狂気半分、半分は死んでいるわいの。まだ長生のある子をば、親故路頭に立すか」と、そのまゝそこにどうと伏し、消え入る許り嘆きしが起直つて涙を押へ

「イヤくどう思ひ諦めても、今別れては又逢ふことはならぬ身の上、譬へ難儀がかゝらばかゝれ、又その時は夫の思案、程は行くまい追付いて、つれて戻らう、さうじゃ」

と子に迷ふ、道は親子のわかれ道、後を慕ふて

おうしゅうあだちがはら

## 奥州安達原

### 〔解説〕

宝暦十二（一七六二）年九月、竹本座で初演。奥州の伝説「善知鳥（うとう）」や「黒塚」を取り入れ、近松半二、竹田和泉、竹本三郎兵衛らが書いた時代物。八幡太郎義家の奥州攻め（前九年の役）で滅ぼされた安倍頼時の遺子、貞任（さだとう）、宗任（むねとう）兄弟が復讐をはかる苦心を描いている。もとの形は五段物であるが、五段目が上演されたのは、初演時と翌年正月だけである。眼目は三段目「環の宮明御殿（たまきのみやあきごん）」で、特に、盲目の袖萩が歌にのせて両親に不孝を詫びる場面は「袖萩祭文（そではぎさいもん）」と呼ばれ、有名。

### 〔二段目あらすじ〕

廉仗直方（けんじょう）なおかたの娘袖萩は、父に背いて浪人と不義をしたため勘当され、前九年の役の後、夫に離れ流浪の末に盲目となり、娘お君と朱雀堤で乞食になっている。通りかかった廉仗は、偶然それが勘当した娘だと知る。袖萩の方も、廉仗の家来の言葉から父が今迄ここに居て、皇弟の環の宮の行方が知れないという難儀に遭っていることを知り、娘を伴い環の宮の御殿へと向う。

兼仗は環の宮を守護する立場だが、宮が誘拐されてしまい、行方を探している。義家に嫁している袖萩の妹の敷妙は、夫の使者として御殿へやって来て、宮の行方が知れない時は義家の役目として敵味方となる旨を伝える。そこへ思いがけなくも義家が現れたので兼仗は全て安倍一味の仕業ではないかと考えを述べる。義家も、瑞祥の鶴を殺した咎で捉えられていた南兵衛を引き出し、安倍宗任であろうと問いたのだが白状しない。

折から兼仗の見舞に來た桂中納言則氏（実は安倍貞任）と南兵衛（宗任）は、それとなく兄弟の再会をし、源氏調伏を約する。

雪の降りしきる中、御殿にたどり着いた袖萩は、祭文に託して不孝をわび、娘お君に会ってほしいと願う。袖萩の夫が貞任であることを知った兼仗は、敵方の妻となった娘とはなおさら会われぬと、雪の中に母娘を置き、家に入る。

兼仗は環の宮を敵に奪われた責めを負って切腹。袖萩も宗任から、敵の源氏方である父を討てと渡された懐剣で自害する。則氏は実は貞任がなりすましていたことを義家に見破られ、謀も失敗に終わったと悔やむ。義家は兄弟に、勝負は戦場でと約し別れる。

# 環の宮明御殿の段

立つて入りにける

たださへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間に直す

白梅も無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは、血筋の縁

不憫やお袖はとぼ／＼と親の大事と聞くつらさ、娘お

君に手を引かれ親は子を杖子は親を、走らんとすれど、

雪道に力なく／＼辿り来て、垣の外そと面に、

「ア、嬉しや、誰も見咎めはせなんだの」

「イ、エ門口に侍衆が、居睡つてゐやしやつた間に」

「ヲ、賢い子ぢや、僂仗様はこの春から主のお屋敷に

はござらず、この宮様の御所にと聞いて、どうやらか

うやら／＼まで来ことは来たけれど、ご勘当の父上母

上様、殊に浅ましいこの形で、誰が取り次いでくれる

者もあるまい、お目にかゝつてご難儀のやうすがどう

ぞ聞きたや」

と、探れば触る小柴垣

「ム、／＼はお庭先の枝折門、戸を叩くにも叩かれぬ

不孝の報い、この垣一重が鉄くろがねの」

門より高う心から、泣く声さへも憚りて簀戸すどに、喰ひ

付き泣きぬたり。僂仗はかくとも知らず

「垣の外面に誰やら人声、アレ女どもはをらぬか」

と、云ひつゝ自身庭の面、外にはそれと懐かしさ、恥

ずかしさもまた先立つて、掩ふ袖萩、知らぬ父、明け

てびつくり戸をびつしやり

「なんのご用」

と腰元ども、浜夕も庭に立ち出でゝ

「僂仗殿なんぞいの」

「イヤなんでもない、見苦しいやつがうせをつて、腰

元ども追ひ出せ、婆、あんなもの見るものでない、こ

つちへお来やれ〜」

と夫の詞は気も付かず

「なにをきよと〜云はっしゃる、犬でも這入りまし  
たか」

と、なに心なく戸を開けて、よく〜すかせば娘の袖  
萩、はつと呆れてまたばったり、娘は声を聞き知れど  
『母様か』とも得も云はず、母は変りし形を見て胸一  
杯に塞がる思ひ、押し下げ〜

「定めない世といひながらテモさても〜〜思ひ  
がけもない」

「コレ〜婆なに云やる」

「イヤさあやつぱり犬でござんした、ほんに憎い犬め、  
親に背いた天罰で目も潰れたな、神仏にも見離され、  
定めて世に落ち果て〜をらうとは思ふたれど、これは  
またあんまりきつい落ち果てやう、今思ひ知りをつた

か」

と、よそに知らずも涙声、様子知らねば腰元ども

「さつても慮外な、物貰ひなら中間衆には貰はいで、  
お庭先へむさくるしい、とつとと出や」

とせり立てられ

「ハイ〜ハアイどうぞござん簡なされてまちつとの  
間」

「ハテしつこい」

と女中の口々

「ヤレ待ってくれ女子ども、ヤイ物貰ひ、お銭あしが欲し  
くばなせ歌を諷はぬぞ、願ひの筋もなんなりと、諷う  
て聞かせ」

と夫の手前、ちつとの間なと隙入れたさ

「あい」

とは云へど袖萩が、久しぶりの母の前、琴の組とは引

きかへて、露命をつなぐ古糸に、皮も破れし三味線の

「ばちも慮外も顧みずお願ひ申し奉る。

「今の、憂き身の、恥づかしさ、

父上や母様のお気に背きし報ひにて、

二世の夫にも、引別れ、

泣きつぶしたる、目なし鳥、

二人が中のコレ、このお君とて、

明けてやう／＼十一の、

子を持つて知る、親の恩、

知らぬ祖父様祖母様を、

慕ふこの子がいぢらしさ、

不憫と思し、給はれ

とあと歌ひさし、せき入る娘、

孫と聞くより浜夕が、飛び立つばかり戸の透間、抱

き入れたさ縋りたさ。祖父も変はらぬ逢ひたさを、隠してわざと矢り声。

「ヤアかましい小歌聞きたふない。女ども、奥へい

て、お客人に付いてゐよ。サ、皆行け行け。コレサ婆、

何うぢうち。早く畜生めを、擲き出してしまひやれさ」

「ア、コレ、腹立ちは尤もなれど、それはあんまり」

「ハテさて、隙入れるほど為にならぬ。武士の家で不

義した女郎め、擲き出すとはまた親の慈悲。長居せば

ぶち放さうか。親の恥を思ふて、名を包むはまだしも

と思ひの外、今となつて身の置き所がなさの詫び言。

恥面も構はずよつくうせたな。但しは親へ面当てに、

わざとその形見せにうせたか、憎いやつ」

と怒りの声。袖萩悲しさやる方なく、

「なんなんの誓文、勿体ない。さりながら、そふ思し

召すも御尤も。大恩を忘れた徒<sup>いたずら</sup>。我が身ながら愛想のつきたこの体。お詫び申したとてお聞き入れが何のある。そりやもふ、思ひ切つてはおります。お屋敷の軒までも、来られる身ではなけれども、お命にかゝる一大事と、聞いて心も心ならず、顔押ぬぐふて参りました。不孝の罰で目は潰れる。この子を連れて、この軒では追ひ立られ、かしこの橋では打ち擲かるゝ憂き目に遭うても、この身の罪に比ぶれば、まだ、まだ業の果たし様が足らぬ、と未来が猶しも恐ろしい。この上のお願ひには、娘のお君お目見へ、と申すは慮外。只の非人の子と思し召し、たった一言お詞を、おかけなされて下され」と、嘆けばお君も手を合はせ、

「申し、旦那様、奥様。外に願ひはござりませぬ。お

慈悲に一言物おつしやつて下さりませ」

と云ひ馴れし、袖乞ひ詞に涙夕が、

「エ、可愛や可愛やな。子心にさへ身を恥ぢて、祖父様ともばゞ様とも得云はぬ様にしおつたは、皆おのれが徒故。畜生の様な腹から、見事犬猫も産みおらず、生まれ落つると乞食さす子を、アレあの様におとなしう、産みつけざまは何事ぞ。余り憎ふておりや物が云はれぬ云はれぬ」

とむごふ云ふのは可愛さの、うらの涙夕

「幾重にもお慈悲お慈悲」

と泣くばかり。儼仗猶も声荒らか。

「ヤア親が難義に遭はふが遭ふまいが、女めがいらざる世話。同じ姉妹<sup>きょうだい</sup>でも妹の敷妙は、八幡殿の北の方と呼ぶるゝ手柄。姉めは下郎を夫に持てば、根性まで

が下主女め<sup>げす</sup>」

と、恥ぢしめられて

「わつ」

と泣き、

「下主下郎とはお情けない。夫も元は筋目ある侍。黒

沢左中とは浪人の仮の名。別れた時の夫の文に、筋目

も本名も書いてござんす。これ見てたべ」

と差し出すを、取り次ぐ紙のはしくれも『詫びの種に

もなれかし』と、思ふは母より直方が読む文体の奥の

名に、『奥州安倍貞任、とは南無三寶。さては貞任と縁

組みしか』と、心もそごろに懐中の、一通取り出し引

きはせせば、『さてこそ同筆。ハアはつ』とばかり当惑

の、色目を見せじとずんと立ち、

「ヤア穢<sup>けが</sup>らはしいこの状。いよいよ以て逢ふことなら

ぬ。サア奥こちへ。ハテぐづ付かずと早おじゃれ」

と尖<sup>すゑ</sup>い詞にせがまれて、母もせひなく立つて行く。

「なふコレ暫し。もふ逢はふとは申しませぬ。お身の

難義のその訳を、どふぞ聞かして下さりませ。申し申

し」

と延び上がり、見れど盲の垣覗き。早暮過ぐる風につ

れ、折から頻<sup>しき</sup>りに降る雪に、身は濡れ鷲のあし垣や。

中を隔つる白妙も、

「天道様のお憎しみ、受けしこの身は厭はねど、様子

聞かねば何ほでも、いなぬいなぬ」と泣く声も、嵐と

雪にうづもれて、『聞こえぬ父』と恨み泣き。次第々々

に降り積もる、寒氣に肌も冷<sup>ひたえ</sup>え切れれば、持病の癩の

差し込んで、かつぱと転べばお君はうろろうろ、さする

背中も釘氷。涙片手に我が着る物、一重<sup>ひとえ</sup>を脱いで母親

に、着せてしよんぼり白雪を、すくふて口に含ますれば、やうやうに顔を上げ、

「ヲ、お君、もふよぎぎる、もふよぎぎる。この又冷える事はいの。そなたは寒ふはないかや」

「イエイエ。私は温かふぎぎります」

「よふ着てゐやるか、ドレドレ。ヤア、そなたはこりや裸身はだかみ。着る物はどふしやった」

「アイ、余りお前が寒からふと思ふて」

「へツエ親なればこそ子なればこそ。わしが様な不孝な者が何として、そなたの様な孝行な子を持った。これも因果うちの中か」

とて、抱きしめ抱きしめ泣く涙。絶え兼ねて垣越しにうちかけ襦うすひらりと浜夕が、

「さつきにから皆聞いてゐる。まゝならぬ世じやな。

町人の身の上ならば若い者じやもの、徒もせいじや。

そんなよい孫産んだ娘、ヤレ出かしたと呼び入れて、  
聳たかよ舅と云ふべきに、抱きたふてならぬ初孫の、顔も  
ろくに得見ぬは、武士に連れ添ふ浅ましさと、諦めて  
去んでくれ。ヨ、ヨ」

と云ふ中に、

「奥、浜夕」

と呼ぶ声に、

「アイ、そこへ参ります。娘よ孫よ、もふさらば。可愛の者や」

と老ひの足、見返り見返り奥へ行く。

折しも庭の飛石伝ひ、雪明りに窺ひ寄る、安倍宗任  
戸を引明くれば

「ア、こわ」

と、立退くお君をちつと捕へ

「コリヤ怖いことはない、そちが叔父の宗任ぢや」

「ヤア宗任様とは夫貞任殿の弟御」

「ヲ、つひに逢はねど、あによめ 嫂の袖萩殿」

「ヲ、そんならお前に問ふたら知れるである、夫婦別  
れるその時に夫に預けた千代童は息災であるかいな」

「ウムその千代童はの、傷寒で死んだわいの」

「エ、ハア」

「ヲ、歎きは理、なにかにつけて一家の敵は八幡太郎、  
こなたも兄貞任殿の妻ならば、今宵なにとぞ近寄つて、  
直方が首討たれよ」

「エ、イあのと、様を」

「ム生けおいてはわれ／＼が大望の妨げ、コレこの懐

剣で」

と手に渡す、難題なんと障子のうち

「曲者待て」

と大将の、声にびつくり

「折悪し、そちへ／＼」

と忍ばせて、胸をすゑてどつかと坐し

「縄引切つて逃げ出でんと存ぜしに、見付けられたは

天命」

と、腕押廻せば、義家公、縄にはあらで真紅の糸、結

びし金札宗任が首にさつくと打ちかけ給ひ

「網に洩れたる鱗うろこを助くるは天の道『康平五年、源

義家これを放つ』と書き記せば、この上もなき関所の

切手、日本國中放し飼ひ」

と、仁者の詞に

「ハ、ア」

はつと、雪に頭は下げながら、底の善悪閉ぢ隠す氷を踏んで別れ行く。夫の最期を浜夕が、白梅の腹切刀、三方に乗る露涙、外にも同じ袖萩が、死ぬよりほかはなくくも、帰る戸口に、父兼仗繫金しつかと座に直り、三方取つて覚悟の矢の根、取るとは知らぬ袖萩が娘に見せじと突込む懐劍、『はつ』と驚き取り付くお君、声立てさせじと抱きしむれば、母は夫が片手に押へ

「まだ女めは去にをらぬか、氣強くは云ふものの年寄つたれば、なんどき知れず、声なりともよく聞いておけ」

と、それとは云はぬ暇乞ひとは露程も袖萩が

「さてはお心和らぎしか、かうなり果てた身の上、どうで追付けのたれ死に、これがお声の聞き納めでござりませう」

と親と子が、一所に死ぬとは神ならぬ、障子押明け立寄る則氏、母はかけおり

「ヤアそなたは自害しやったか、コレ兼仗殿もご切腹」  
「エ、あのとゝ様も」

「娘も」

と一度に驚き転び降り、呆れ涙に別ちなし、手負ひを  
見届け中納言

「貞任に縁組まれしご辺、所詮死なで叶はぬ命、袖萩とやらんも死なずばなるまい、ハア健気なる最期のやうす天聴に達し申すべし」

と、冠氣高くしづくと心残して立出づる、衣紋に薫る風ならで、怪しや聞ゆる鐘の声、『コハいぶかし』と立戻り、辺りに心目を配る、一二の対の屋隅々に、太鼓の音のかまびすし。

「ハテ不思議や、この明御殿に陣鐘を打立つるは、なに者なるぞ」

と振り返る、一間のうちより高らかに

「八幡太郎義家これにあり、奥州の夷えびす安倍貞任に見参せん」

と、立出で給ふ御大将、続いてかけ寄る二人の組子、ゆんでめて弓手馬手にはつたと蹴飛ばし

「ヤアラ心得ず、桂中納言則氏を、貞任とはなにを以つた」

「ホ、ウこの義家、てんげんつう天眼通は得ざれども、過ぎつる大

赦みぎりの砌、桂中納言なりと名乗り来る曲者、つくぐ

面体を窺ふに、われ幼き時見覚えし安倍頼時にさも似たり、さてこそ貞任に極まつたり、宮の御行方、とつか十握の宝剣をも取り隠し、なほ二種ふたいろの御宝を奪ひ、親が根ざしの大望を達せん巧み、抗はれぬ証拠はこれ」と、白旗を取り出し給ひ

「最前汝が弟宗任と、別れほど経し兄弟の対面、梅の花によそへてかけたる謎、はやくも悟つてこの歌、『わが国の梅の花とは見つれども』と連ねし上の句、梅の花は花の兄、わが国とはわが本国、奥州の兄ならんと、兄弟一致の血判に白旗を汚し、源氏を調伏、この上にも返答あるや、サ、サ、サ、なんと〜」

と差し付けられ、貞任無念の髪逆立て

「チエ、口惜しやな、われ一旦浪人となつて、都のや

うすを窺ひしが、官位なくては大内へ入り込まれずと、  
流人赦免の折を幸ひ、島にて死せし則氏といつはり、  
初めて逢ふた舅廉仗に腹切らせしも一つの手だて、所  
詮わが謀空しくなれば、親の敵人幡太郎、運を一時に  
決せん」  
と、太刀に手をかけ詰め寄れば

「ホ、ウ急いたりな貞任、汝獅子王の勢ひあるとも、  
八方に敵を受け遁るべきや、又その方が一命は、宮宝  
劍の御ありか白状する迄助けおく、命存ながらへ父頼時が  
弔ひ軍は又重ねて、弓矢の情は相互ひ、夫婦の操も節  
義は一つ、貞心厚き袖萩が、最期の際に暇乞ひ」  
と情の言葉に、袖萩が

「なう懐かしの貞任殿、最前からよう似た声とは聞き  
ながら、六年ぶりで廻り逢ひ、顔見ることも得叶はぬ

か、死ぬる今際にどうぞしてこの目が開きたいコレお  
君」

「とく様なう」

と稚な子を、見るにさすがの貞任も、共に血をはく  
親々が、恩愛の涙はら〜、思ひ隔つる八重垣に  
落つる涙は雪とけて水かさまさる如くなり。大将哀れ  
に思し召、

「父親の縁切れたるお君、義家が子に養はん」

と、仰せに廉仗有難涙、

「いかなれば某は敵と味方を躰にもつ、因果も思ひめ  
ぐらせば、代々不和なる源平を、先祖に背いて縁組ん  
だ我が誤りを白旗のこの白梅を血に染て、元の平家の  
寒紅梅。娘々」

「父上」

「いざ一所に、智殿さらば」

「我が夫さらば」

「廉仗殿」

「母様のふ」

と別れの涙、母の浜夕幼子も一度にわつと濡る袖、御大将も直垂ひたれの袖射削つてあまりの矢先、竹にたちまちすつくと宗任

「最前見遁し帰りしは、兄弟本意を遂げんため優曇華まさりの親の敵、サゝ、勝負々々」

と詰めかくるを、貞任『暫し』と押しとどめ

「晋の予讓は衣を裂くきぬ、この白旗をまつこのごとく手に取れば、八幡が首引提げんは案のうち、敷妙の身には大切な夫婦の縁を継目の旗、ソレ大事に召され、浜夕」

と渡すは舅の幡天蓋、翻したる梅花の赤旗

「奥州に押立てく、父頼時が弔ひ軍、ひとまづこの場は宗任来れ」

「ハツ、ハツ、ハゝゝゝ、実に尤も兄者人、雪持つ笹は源氏の旗竿、一矢射たるは当座の腹癒せ首を洗つて義家お待ちやれ」

「ホウくくく、ヲ、互ひに勝負は戦場々々、まづそれ迄は桂中納言則氏卿ご苦勞さぶら」  
と式礼に、

「おさらば」

「おさらば」

と敵、味方、着する冠装束も故郷へ帰る袖袂、雁の翅つばさの雲の上、母に別れて稚な子が  
「父よ」

と呼べば、振り返り、見やる目元に一時雨、ぱつと枯  
葉のちりぐ／＼嵐心弱れど兄弟が、また取り直す勇み声、  
よるべ涙に立ち兼ねて、幾重の思ひ浜夕が身に降る雪  
の白妙になびく源氏の御大将、安倍貞任宗任が武勇は、  
今に隠れなし。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。